

哀悼日記「そのときまで」

指定居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ
ケアマネジャー 木村 晃子

日記や手紙の類は、小説などの読み物より興味深いところがある。それは、日記や手紙は極めて個人的な領域だということと、それらを覗き見した瞬間に、時空を超えて、その個人的な領域に立ち入れることができるからだと思う。一方、個人的な領域でありながら、個人の置かれた環境を垣間見ることができる。それは、一つの歴史を知ることにもなるだろう。

この10月に、11年にも渡る療養生活を終え、76歳の父は天国へ旅立った。50歳の頃に、癌を発病。余命3か月の宣告を受けた。そこから四半世紀以上も与えられた命があった。当時、20歳だった私が今は46歳。父がいなくなってから、父の日記や父宛に届いていた古い手紙を通して、私の知らない父に出会った。あの時にはわからなかった父の想いが、今なら少しわかるような気がする。「置き土産」というものだろうか。父亡きあとに目にした、病床日記を振り返りながら、私の心に生じるあれこれを「哀悼日記」として記録しておきたい。今、声にして伝わらないことが、いつの日か、私の子どもたちに何かを残すことができるのではないかと考えながら・・・。

時空を超えて伝わる『そのときまで』

『そのときまで』

病床日記

いかならむ心さき行く夜長かな

癌ときき心静まる霜夜かな

寒月にいたしと一度言いてゐる

生徒来て黙したり虎落笛

支へられ力たしかな冬がこひ

大根を洗う手もときを見つめけり

平成元年10月。50歳だった父は、秋から続く治りの悪い咳を懸念して、係りつけ医から、地域の総合病院へと診察を変えた。その場で即入院。自宅にいた母に、病院から電話が鳴った。医師に呼ばれ、父の病室へ行く前に、母は病状説明を聞くことになった。「余命3か月です。咽頭がんです。すぐに治療を開始する必要がありますが、ここではできません。札幌の北大病院へ紹介します。」

母は、どのような気持ちでこの説明を聞いたのだろうか。札幌勤務をしていた私の職場に母から電話がかかってきて、先の内容を電話口で聞かされた。その後、直近の休日に実家に帰ったが、既に父には病名も予後も知らされていた。

癌の告知が当たり前の時代ではなかったと記憶する。けれども、自分のことについては、正しく真相を知っておきたい、というのは常日頃からの父の生きる姿勢だった。当然、母は父にそのことを知らせたのだと思う。

父や母がどのような不安を持っていたのか、その時、私は想像することすらなかった。

紹介先の大学病院は、生憎の満床で入院受け入れができない状況だったため、協力病院への入院が決まり、そこから放射線療法に通うようになった。諸々の父のスケジュールの調整があり、放射線治療の開始は、診断を受けた翌月11月からに決まった。

寡黙な父。痛みも口にすることはなかった。今、振り返ると、父の沈黙が、私たち家族の不安を大きく減らしていたのだと感じる。

放射線治療を開始する前に、甥の結婚式に参加するために、病院から外泊許可をもらい、結婚式に参加した。ふるまわれたホテルの料理の数々が、当時、喉の痛みで食が進まなかった父にとっては、久しぶりの味わいになったようで喜んでいて。その後は、病巣の痛みと、放射線治療でダメージを受けた皮膚の痛み（放射線の照射によって、皮膚がやけど状に荒れてしまっていた。）と闘っていた。

父の病床日記からは、これからの自分の余命について、冷静に立ち向かう様子が感じられる。いつでも、何事にも動じない落ち着きを持っていた父を思い出す。その父の立ち居振る舞いがあったからこそ、家族は不安もなく過ごせていたのだろう。

この日記の中の、「虎落笛（もがりぶえ）」は、病巣の痛みを表しているように思うが、我慢強さと、生徒の前に凜としている教員としての父の姿が浮かぶ。私の中では、父親像はほとんどなく、いつも映るのは教師の顔をした父だった。

親としての動じなさが子に与える影響は大きい。もし、あの時、父が不安の只中にいることを目の当たりにしたら、私には何ができたのだろう。きっと、何もできずにいたと思う。27年も経ってから、父の想いに触れた時、今なら親としての立ち居振る舞いを受け継ぐことができると思う。時空を超えてもらった置き土産は「動じなさ」だ。

病院へ妻子が守る霜の道

待つ宵や千々の思ひももとのまま
ふとさめし眼につれなくも冬の月
病めばベッドにすわる夜寒かな

兄弟叔父叔母もるる寒雀

肩や背に娘の手ある雪見かな
見舞花の色香も優し冬至かな

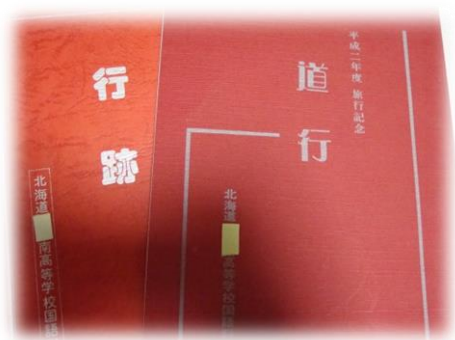
教え子の雪踏み分けて来たりけり

兄弟も願かけてみる煤払い
鶴渡る重ねて千羽ここにあり
折鶴にかけし心か明の空

病室に千羽鶴あり雪明かり

寛容な父のもとへは、いつも多くの人の心があった。木枯らしの吹く時期に入院した父の病床からの景色はすぐに銀色へと変わり、厳しい闘病生活と重なる景色の移り変わりだったと思う。大きな通りからひとつ中道に入ると、見舞中に降り積もった雪の小道は、先行く誰かが踏み固めた足跡に沿って歩を進めるしかない。病院を背に歩く私たちの後姿を案じてくれていたのもまた、父だった。その眼差しには気がつかなかったけれど。

千羽の鶴は、宝くじのはずれで折られたものだった。病気に当たりませんように・・・という意が込められていると教わった。父は、夏に冬に、毎度100枚の宝くじを買っていた。小さな当たりも、そしてはずれの中にも楽しみが宿っていたのだろうと思う。



←父が、勤めていた学校の国語科での旅行記。平成2年には、特別寄稿として、病床日記が収められている。

冬籠るひと時なれど我家かな
遠くから雪はねたるかブルの音
友の母願かけ黙す除夜の鐘

この余命何にかかげむ初御空

時来れば我を導く初日あり

ひとすじの光求めて明けの春

松の内元氣出せよと生徒言ふ

七草や秤の計をただ見詰め

ぼつぼつと姉の文あり露の臺

退院す福寿草吹く我家かな

見舞来し兄病みてあり暮れの春

灌仏会月に一度の観察日

風光る学校にありとときを待つ

放射線治療の途中の年末年始。外泊許可を得て、自宅に戻ってきた父。皮膚のやけどの状態が痛々しかった。人に触られるのも辛かったのだろう。軟膏を塗布したガーゼの交換を、毎朝自分で行っていた姿が今でも鮮明に浮かぶ。父の為に、願かけをしてきていた教え子のお母さんの話がとても印象に残っていた。

庭に福寿草が顔を出すのは、雪解けのころ。早くて4月。はっきりとは記憶していないが、父が治療を終え退院したのは、2月か3月だった。福寿草の芽吹きに自分の再生を願っていたのかと思う。

既に、余命3か月は過ぎていた。父の忍耐の治療が、私たち家族から「余命3か月」という説明の記憶はなくなっていた。

50歳で、癌の告知を受け、余命3か月と宣告された父のその後。まもなくパーキンソン病の診断もつき、50代は、仕事をしながら療養を続けた。放射線治療の後遺症で嗄声に悩み、早期退職も考えていたようだが、母の叱咤激励によって、60歳の定年まで仕事を全うすることができた。

定年を迎えた60歳からの父は、入退院を繰り返す自宅での闘病生活を5年ほど送り、その後は自宅生活が困難になり、65歳で長期療養のできる病院への入院となった。そこから11年の療養生活。声を発することもできなくなり、使用していた文字盤での会話もなくなり、結局、沈黙の療養生活だった。その傍らで、母が一人おしゃべり上手になっていった。返答のない声掛けはどのようなものなのだろう。仕事と子育てに追われていた私には、母の気持ちを推し測る余裕もないまま一年一年が過ぎていった。

おめでとう

愛しき夫つまの よろこびと

深き歩みの 素晴らしきかな

木漏れ日に 窓辺のカフェ

香わしく

ほのかにゆれて 想いはめぐる

花園は 海辺の丘に咲きみだれ

白いスーツの そと手をひく

母がどのような想いで父のもとに通っていたのかはわからない。ふと出てきたメモ書きには、母の字で記された詩がいくつかあった。これは、平成20年の9月、父の誕生日の近い日に書かれたものだった。誕生日を祝っている様子。病床で迎える誕生日を祝っている中で、最後の二行は何を表しているのだろうと、母に尋ねた。花園は、道東にある網走原生花園。父と母が、結婚前に初めてデートをした場所だと言う。白いスーツを着ていたのは母。初デートの様子をこんなにも覚えているものだろうか、と感心した。なんだかんだと、仲睦まじい夫婦だったのだろう。(父と母のドタバタ夫婦は、当マガジン7号で取り上げている。)

母が病床に足を運んだ11年という歳月は、他の誰にも代わることのできない「夫婦」の時間だったことと思う。

極めて私的な事柄ではあるけれど、読んでくださる人に何を届けることができるのだろうか。内容はともかくとして、「伝える」ということが、声を通さなくてもできるということが伝わったら幸いだ。後になってわかること。時間が人の理解を深めてくれることもある。上手くはないけれど、書くことが好きな私に、書いたものを通して教えてくれた父と母。言葉は残る。時空を超えて伝えるために、言葉を残していきたいと思った。

今にして思えば、あの時の余命宣告から27年。長年の私の原家族の物語の傾向が大きく書き換えられたような気がする。にぎやかな父と母の夫婦の時間が、最後の11年で静かな夫婦の時間へと変化した。父も母も変わった。その変化の時間こそ、今は私にとっては、

ちょっと誇りだ。この両親のもとに育って良かった。これが、私のオルタナティブストーリーというものだ。



平成27年10月10日午後2時30分 父、天国へ。いつか会える、そのときまで・・・